

地域社会と連携した体験型環境教育の試み

——環境 NPO との連携を中心に (2) ——

藤野裕弘^{*1}・内田晴久^{*1}・室田憲一^{*1}・北野 忠^{*2}・
藤吉正明^{*2}・藤田成吉^{*1}・小澤紀美子^{*1}

1. はじめに

人類社会の持続的存続には、環境問題を広い視野から考え、問題の解決に向けて行動できる人材の育成が必要である。その様な人材育成には、人文・社会・自然科学の垣根を越えた学際的で実践的な教育プログラムの構築が極めて重要となる。その中でも実践的な環境教育への期待は大きく、2000年には国連における日本主導の「持続可能な開発のための教育の10年」がスタートした¹⁾。さらに、日本では環境教育を推進し、国民の環境保全意識を高めることを目的とした「環境保全活動・環境教育推進法」が2003年に成立した²⁾。現在、多くの教育現場では、小学校～高校の「総合的な学習の時間」を活用した環境教育や各地域の NPO 法人による環境教育、大学と初等中等教育との連携による環境体験プログラムなど、様々な取り組みがなされてきている。

東海大学では、環境分野における文理融合型の人材育成および研究の向上を図り、その成果を、積極的に地域・社会に還元することを目的の一つとした環境憲章を1997年に発表している³⁾。

東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程では、自然科学と社会科学を融合させた学際領域として「人間環境領域」を構築している。そこでは、理系と文系を融合させた、より学際的・総合的な視野で環境問題を認識し、解決策を考察できるような学外での様々な体験を重視した環境教育が具体化されている。大学院人間環境学研究科でも文理融合の実践教育が展開されている。この我々の実践的な環境教育プログラムは、2011年度の日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会21期提言の中で引用されるに至っている⁴⁾。こうした背景のもと、我々は、環境 NPO と連携した体験型環境教育を実施してきた⁵⁻¹⁸⁾。今回は、人間環境学科自然環境課程と人間環境学研究科、湘南里川づくりみんなの会（神奈川県湘南地域県政総合センター他）が連携して、金目川水系流域で実施された「クリーンキャンペーン」に学生を派遣した企画について報告する。

受理日2011年11月23日

*1 教養学部人間環境学科自然環境課程教授

*2 教養学部人間環境学科自然環境課程准教授

2. 湘南里川づくり

「湘南里川づくり」とは、湘南地域のふるさとの川である金目川水系の豊かな自然や文化、それらと調和したくらしなどを子孫に残すべき貴重な財産として、次世代を担う子どもたちに引き継いでいくため、源流から下流に至る全流域を対象に、市民（湘南里川見守り隊）と行政の協働により清掃、植栽、生き物観察会など河川の保全・活用を通じて、みんなに愛され親しまれる川づくり（里川づくり）を推進する活動のことである。

また、「湘南里川づくり」の目的を達成するため、全員で共有しておくべき基本的な考え方や方向性を、地域の特性にあわせた流域の理想像（ビジョン）として提示している。キーワードとしては、「世代を超えて川を身近に」、「川が繋ぐ人のつながり」、「川が育む地域再生」を設定している。

なお、「湘南里川見守り隊」は、「湘南里川づくり」に賛同した市民活動団体、個人、企業、教育関係者で、湘南里川づくりみんなの会に会員登録した方々である。

3. 実施概要

2010年に試行を始めた「湘南里川づくり」において、流域で活動する民間や地方自治体関連の団体が清掃活動を集中して行う期間を「クリーンキャンペーン」として参加呼びかけに協力している。その各団体の企画に学生が参加し、その内容と各団体の通常の活動をレポートさせることが授業のおもな構成となっている。学生が参加した団体は、以下の表の通りである。

クリーンキャンペーンにおいて学生が参加した団体（湘南里川見守り隊）一覧

市域	団体名	実施日
平塚市	河内川あじさいの会（河内川）	6/13（日）、6/20（日）
	21渋谷川プロムナードプラン推進協議会（渋谷川）	7/4（日）、8月：写真展
秦野市	くずはの家「えのきの会」（葛葉川）	7/4（日）、7/24（土）
	鶴巻ホテルの会（善波川）	6/20（日）、7/11（日）

4. 結果と今後の展望

湘南里川づくりにおいて、流域で活動する NPO 法人や市民団体の交流は非常に重要である。従って、各団体の活動内容をポスターにまとめ、ポスター展示会を実施することは、各団体の相互理解に有効であった。さらに、これらの団体の情報交換やネットワーク構築のために企画された里川フォーラムでもポスター展示を行うことで、各団体の交流を効果的に進めることができた。学生は、クリーンキャンペーン参加の成果をポスターにまとめ、展示会で発表した。クリーンキャンペーン参加団体は、活動内容が異なることから、学生が作成したポスターは、さまざまな内容となった。その成果をまとめたポスターは、一部を改変して図 1～4 に示した。

クリーンキャンペーンへの参加は、学生の視野を広げるうえで、有効であったと考えられる。また、このような活動に学生や院生が、企画段階から参加することは、「学外での様々な体験を重視した環境教育」を積極的に展開している自然環境課程や人間環境学研究科にとって、目的に沿った理想に近い実習の機会を得ていることになる。

以上のことから、参加する団体との連絡体系や天候不順時の対応など課題は残るものの、このような実践教育は、今後も継続することが重要である。加えて、伊勢原市を拠点として活動する団体へ学生を参加させることも検討課題である。

成果の公表

本研究は、「環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (6)」¹⁸⁾ の成果を背景に実施しており、その成果の一部は、「地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO と連携を中心に (1)」¹⁹⁾ に反映されている。また、成果をまとめた以下のポスター展示会を実施した。

① SOHUM「湘南里川づくり地域共生プロジェクト」ポスター展示会

展示期間：2010年12月13日（月）～17日（金）、展示時間：9時20分～17時00分、展示場所：東海大学湘南キャンパス（10号館 S-PLAZA）

②「湘南里川づくりフォーラム2011」ポスター展示会

展示期間：2011年1月30日（日）、展示場所：東海大学湘南キャンパス松前記念館地下講堂

謝辞

この教育研究の一部は、2010年度の研究補助金により実施された。関係各位並びに参加学生に、感謝申し上げます。

参考文献

- 1) ESD-J 特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議
<http://www.esd-j.org/>
- 2) 環境省総合環境政策局環境教育推進室、環境教育・環境学習、環境保全活動
<http://www.env.go.jp/policy/edu/>
- 3) 東海大学環境憲章 <http://www.u-tokai.ac.jp/banner/kankyouden.html>
- 4) 日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会 21 期提言：「高等教育における環境教育の充実に向けて」。2011 年 9 月 22 日。
- 5) 室田憲一・藤野裕弘 他：NPO と連携した体験学習型教育の試み。2003 年度日本環境学会第 29 回研究発表会講演要旨集。pp. 178-180 (2003)。
- 6) 室田憲一・藤野裕弘 他：NPO と連携した体験学習型教育の試み。東海大学紀要教養学部。第 34 輯。pp. 331-333 (2003)。
- 7) NPO 法人自然塾丹沢ドン会編集：名古木の自然——丹沢の雑木林・棚田の復権と生き物たち、夢工房、神奈川。pp. 63 (2003)。

- 8) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験学習型環境教育の試み (1)．2004 年度日本環境学会第 30 回研究発表会講演要旨集，pp. 84-85 (2004)．
- 9) 室田憲一・藤野裕弘 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (1)．東海大学紀要教養学部，第 35 輯，pp. 271-276 (2004)．
- 10) 室田憲一・藤野裕弘 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (2)．2005 年度日本環境学会第 31 回研究発表会講演要旨集，pp. 240-243 (2005)．
- 11) 室田憲一・藤吉正明 他：環境 NPO と連携した体験学習型教育の試み——農業体験事例報告——．東海大学紀要教養学部，第 36 輯，pp. 1-11 (2005)．
- 12) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (2)．東海大学紀要教養学部，第 36 輯，pp. 249-255 (2005)．
- 13) 藤野裕弘・藤吉正明 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (3)．東海大学紀要教養学部，第 37 輯，pp. 247-252 (2006)．
- 14) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (1) ——乗船体験実習——．2007 年度日本環境教育学会第 18 回大会研究発表要旨集，pp. 65 (2007)．
- 15) 室田憲一・藤吉正明 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (2) ——農業体験実習——．2007 年度日本環境教育学会第 18 回大会研究発表要旨集，pp. 66 (2007)．
- 16) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (4)．東海大学紀要教養学部，第 38 輯，pp. 271-278 (2007)．
- 17) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (5)．東海大学紀要教養学部，第 39 輯，pp. 289-294 (2008)．
- 18) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み (6)．東海大学紀要教養学部，第 40 輯，pp. 365-370 (2009)．
- 19) 藤野裕弘・内田晴久他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み——環境 NPO と連携を中心に (1) ——．東海大学紀要教養学部，第 41 輯，pp. 315-328 (2010)．

活動目的



河内川を「子どもたちが川の中に入って遊べるような環境にしたい」という願いから、活動が始まりました。

河内川あじさいの会の活動

かつて河内川はドブ川と化し、悪臭を放つ、人が寄り付かない川となっていました。平成4年ごろから、地域の方、自治体の方々がごみ問題に取り組み、河内川のゴミ拾いや草刈りの活動を始めました。また、平成8年にはあじさいの会(当時は河内川あじさいを愛する会)も発足しました。そして平成10年に、「土手にきれいな花を植えれば不法放棄もなくなるだろう」という思いを込めて、堤防へのあじさいの植栽が始まり、現在では鎌倉橋から下河原橋までの約1.4kmの両岸に約2000本のあじさいが植樹されています。このように、あじさいの会による植樹、また、ゴミ拾い、草刈りなどの活動によって、河内川は平塚市のあじさいの名所になっています。



河内川での清掃の様子

河内川あじさいまつり

2010年6月20日に第六回河内川あじさいまつりが開催されました。あじさいの会を中心に地域が一体となった会場は、とても盛り上がっていて、子供から大人まで楽しんでいました。また、この日を待っていたかのように、あじさいの会による日頃の賜物であるあじさいの花は満開でした。



湘南里川づくりを進めていくためには大人から子供まで皆で川に向き合う必要があると思います。そのためには地域や家族が皆で参加する清掃日や川で遊ぶ日等を自治体や学校が定期的に行い、積極的に参加する必要があります。

河内川あじさいまつりの様子



あじさいの見ごろを迎える河内川

河内川あじさいの会の活動での人に見られる川への変革、地域全体の地道な努力は、湘南里川づくりでとても大切だと思いました。人の生活に身近な川を子供から大人まで多くの人が見て楽しめる川にすることによって、川に対する思いが深まり、川の自然を大切にしようという気持ちは強くなると思います。また、あじさいまつりの開催、近隣の小学生が河内川について考える時間があることで、地域全体の幅広い世代の理解深まり、そして全体で活動に取り組めることができたと思います。あじさいの会を中心としたこのような活動は、みんなの川はみんなで守るという、里川づくりの理想の姿なのではないのかと感じました。

図1 河内川あじさいの会の活動に関して

活動背景

雑草が生い茂り、不法投棄が増える一方の洪田川をそのまま放置しておいたら、川の環境は悪化するばかりです。富士山をはじめとして、箱根連山や丹沢連峰を一望する景観に恵まれたこの沿川をかつての環境に近づけ次代を担う子供や孫たちのために思い出となる古里を手づくりで造ろうと沿川8地区の連合自治会が協同で活動に取り組むことになりました。

土手の環境が良くなれば不法投棄も減り、ひいては河川環境の浄化になるので、雑草刈りや桜木・あじさい草花の植栽等により、ブロムナードを創造し、また河川を愛する人々を増やすための啓発活動を目的としています。

活動内容

平成8年1月に「21洪田川ブロムナードプラン推進協議会」を、沿川8地区の連合自治会により発足され、同年秋に地区住民の意向を問う署名を求め、15,651名の賛同（全体の約70%）を得ました。以降、毎月の定例会で計画の検討と研究を実施しています。計画の具体化として、住民にわかりやすいブロムナードづくりを進めることとし、第1期は桜を植えました。

平成8年3月、協賛金の目途もある程度立ったので桜の苗木300本を一斉に植樹しました。また、4月に活動のPRと啓発のため、会報第1号を発行しました。以降、桜の植樹は、9年と10年で200本、合計で500本となりました。その維持管理としての草刈り、消毒、施肥にも毎年500名以上が参加しています。

西暦2000年を記念して桜まつりを開催し、好評であったので、以降、毎年開催しています。1日で4～5万人の人出で、市民の河川への関心を高めていると考えられます。また、平成12年以降発行しているパンフレットも啓発に役立っています。

平成13年度から第2期の活動としてあじさいの植栽を始め、13と14年度で2,850株を植えました。



結果と効果

- 〔1〕 土手がきれいになり、不法投棄が大幅に減りました。
- 〔2〕 河辺の環境がよくなったので早朝から陽の暮れるまで、ウォーキングをする人の絶え間なくなりました。
- 〔3〕 行政当局も、こうした活動を評価して土手の一部を透水性舗装で歩き易くし、さらに水辺とのふれあいを考え、階段式護岸を行ってくれました。また、会では、休憩場所の設置を検討しています。

考察・意見

私たちが参加した活動は、洪田川の草刈とゴミ拾いをする活動で、右に示した写真はその時のゴミです。川辺には、さまざまなゴミが捨てられており、缶やペットボトルは当たり前で、一番印象的であったのがパイプベッドです。他にも衣類や布団などが捨てられていました。捨てる人は、ゴミを捨てることをなんとも思っていないのでしょうか。

私は、以前の洪田川の状況を知りませんが、ゴミ拾いを始める前はずっとゴミの量が多かったと考えられます。さらに、ゴミを捨てる人を減らしたいのならば、看板を置くことなど、新たに活動を加えるべきであると感じました。いつ見ても綺麗な川という状態にしたいと思っています。



図2 21洪田川ブロムナードプラン推進協議会の活動に関して

えのきの会とは？

えのきの会は、くずはの家自然観察指導員養成講座を修了した方々からなる会で、くずはの家が主催する月例観察会などでボランティアとして運営をサポートしています。えのきの会は「自然に親しみ・自然に学び・自然を大切にする心を培い、自然指導員としての資質の向上を目指し、地域に自然への理解・関心を深めるための環境づくり活動を行う」ことを目的としています。



くずはの家・葛葉緑地

えのきの会の主な活動場所となっているのは秦野市にある「くずはの家」です。くずはの家は、かながわのナショナル・トラスト第1号に指定された葛葉緑地内に開設された施設で、生物や化石、星座などの本が収められている閲覧室と、観察会内での工作や講演会などで使うことのできる研修室からなるログハウスです。くずはの家は葛葉緑地の自然と市民とが触れ合うきっかけをつくる大切な拠点となっています。

活動内容

「えのきの会とは」でも紹介した通り、えのきの会の活動の1つは自然観察会でのボランティア活動です。くずはの家主催の月例観察会は毎月原則として第4土曜日に行われ、観察会のテーマごとにどの分科会のメンバーが担当するかが決められています。観察会には毎回多くの子どもや親子が参加し、自然とのふれあい方からもの作りの楽しさまで、さまざまなことを楽しく学習しています。自然観察会以外の活動としては、各分科会を中心とした観察や調査、えのきの会会員を対象とした研修会、年4回の会報作成、葛葉緑地内の清掃活動などがあり、観察会以外のところでもえのきの会は精力的に活動しています。

里地里山と同様、里川環境も人の手が入ることや人の関心がそこにあり続けることで初めて維持することができます。このことから「地域に自然への理解・関心を深めるための環境づくり活動を行う」というえのきの会の活動目的は湘南里川づくりにとって大切な考え方となってくると思いました。その地域に住む人たちの持つ自然に対する関心や知識を同じ地域に住む人々と共有する観察会などの取り組みは、めぐりめぐってその地域の環境を守ることにつながります。えのきの会をはじめとしてそのほかのたくさんの団体の活動によって、身近な自然環境への関心が増えることが里川づくりの最初の一步として大切なことだと思います。

また湘南里川づくりでは「湘南里川見守り隊」に参加している団体同士のつながりを強くし、地域の人々にとっても里川づくり活動がよい学習の機会となるために夏休みに参加団体のいくつかに参加するスタンプラリーのようなものを開催してみるのもよいと思いました。

水辺で遊び隊活動の様子



研修室での工作



葛葉緑地清掃活動



図3 くずはの家えのきの会の活動に関して

鶴巻ホタルの会の活動目的

鶴巻ホタルの会は、25～30年前の鶴巻にたくさんいたホタルが、現在では全くいなくなってしまったことから、田んぼにホタルを取り戻そうとしている団体です。鶴巻ホタルの会は三年前から田んぼの活動を始めました。

鶴巻ホタルの会の活動

鶴巻ホタルの会の活動は、私も参加させていただいた田植えや草刈りのほか、稲刈りなどを行っています。この活動は三年前から行っており、現在では、鶴巻ホタルの会を立ち上げた人たちのほかに、ボランティアで参加される大人の方やお子さんなど、たくさんの人たちで、田んぼをしっかりと管理することでホタルの好む水環境を管理しています。



子供たちも一生懸命田植えを頑張っています。



活動結果

平成16年2月から活動を始めた「鶴巻ホタルの会」ですが、田んぼの活動は、今回が3年目となりました。この3年間の活動のおかげで様々な生物や植物などがたくさん増えて、今年初めてホタルが5匹飛び、田んぼにホタルが復活しました。

まとめ

今回「湘南里川づくり」に参加させてもらい、身近な自然を守っている団体がたくさんあることがわかりました。そして、その身近な自然も数十年の間にたくさんの生物たちがいなくなっていることがわかりました。また、自分たちが現場に行き、地元の人話を聴き、実際に体験もしてみても、自分たちが住んでいる場所も環境破壊が進んでいることがわかりました。私はこれらの活動を、教育現場である学校の授業として取り入れていくと、たくさんの方が「湘南里川づくり」を知り、より身近に感じる存在になると思いました。

図4 鶴巻ホタルの会の活動に関して